

2025年1月6日発行

神戸学院大学有瀬図書館 展示通信第74号

MERIDIAN



― 伝統の色と織物 ―

神戸学院大学有瀬図書館本館2階
エントランスコーナーにて開催中!

2025年1月6日(月)～3月23日(日)

*開催時間や開催期間は変更になることがあります。図書館HPにて、ご確認のうえご来館ください。

縞帖(縞帳:しまちょう)とは

江戸時代後期から明治にかけて商品経済がまだ一般化していない頃、全国各地の農村で女性たちは自家用の縞や格子を織りました。家族のために糸を紡ぎ、織り、仕立て、手入れをして着せる作業は婦女子の大事な仕事であり甲斐性でした。

縞帳はそんな女性たちが織りあげた布の端を切り取って紙に張りつけ、柄の心覚えとしたものが基になっています。その後、中間業者が入って客からの注文を取るようになると見本帳としての役目を持つようになります。

縞、格子は先にデザインがあるのではなく織り手の感覚や家庭事情があって仕上がっているのです、柄に特別の名称はないものがほとんどです。



伝統色の成り立ち

日本人は古くから、「色」を繊細な感覚で感じ取り、生活や文化の中に活かしてきました。

日本の伝統色はその色の名も美しく、趣があるものばかりです。山地や河川・平野など、さまざまな地形が見られる日本列島。日本人は多彩な自然や草花の微妙な色の違いを見分け、多くの色彩の名前をつけてきました。

日本の伝統色は460種類以上あるとされています。

中には、身分によっては身に着けることが禁じられた色もありました。その代表的な例として、聖徳太子が制定した冠位十二階があります。役人に位を付け、冠の色によって区別できるようにする制度です。昔から日本人にとって色彩は、身近であるとともに、社会の仕組みにも組み込まれている重要な要素でした。

身分の高さ

大徳
小徳
大仁
小仁
大礼
小礼
大信
小信
大義
小義
大智
小智



趣のある日本の色

色ひとつひとつに名前があり、意味があります。趣深い日本の伝統色にはどんなものがあるのでしょうか。

山吹色 (やまぶきいろ)



山吹とは日本に自生するバラ科の植物で、「万葉集」や「古今和歌集」、「源氏物語」などにも登場します。

茜色 (あかねいろ)



アカネ科アカネという植物の根から採れる染料が使われています。「あかねさす」という枕詞にも使われるように、夕焼けのイメージを持つ色です。

浅葱色 (あさぎいろ)



葱とは野菜のネギのことで、ネギの若葉の色に似ていることから、浅葱色と呼ばれるようになりました。

撫子色 (なでしこいろ)



撫子とは、夏から秋に淡紅食の花を咲かせる植物で、襲(かさね)の一つとして「源氏物語」にも登場します。

襲(重ね：かさね)の色目

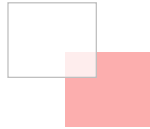


平安時代以降、公家社会に行われた衣服の表地と裏地、また衣服を重ねて着たときの色の取り合わせの種類のことをさします。男子では直衣(のうし)・狩衣(かりぎぬ)・下襲(したがかさね)などの、女子では唐衣(からぎぬ)・袷(うちき)・細長などの表地と裏地や、五つ衣(ぎぬ)・単(ひとえ)などの重なりの色の配合のことを襲(重ね)といいます。男女とも季節や年齢などで着用する色が定まっており、所持する懐紙の重なりの配合にも使われます。



花薄(はなすすき)

中紫+白



雪の下(ゆきのした)

白+中紅梅



壇(まゆみ)

中朽葉+中萌黄

日本の染物



日本の染色の歴史は一説によると縄文時代(紀元前)には始まっていたといわれています。

当時は、「摺り染め」と呼ばれる手法で染色が行われていたそうです。摺り染めは、植物や花、土などをそのまま摺り付けて色を付ける染色方法です。奈良時代に入ると大陸から、蠟や糸などを使用し、染料が染みこまないようにして布に模様をつける技術が伝わり、戦の無くなった江戸時代になると、染色技術は飛躍的に発展していき、数多くの絞り染めの技法が発展しました。

【絞り染め】とは

豆絞り

手蜘蛛絞り

京極鹿の子絞り

重ね縫い絞り

生地の一部を縛ったり、つまんだりして圧力をかけて、染料が染み込む部分と染み込まない部分を作ること、模様を作り出す技法の一つです。



その後「糊防染(のりぼうせん)」という染色方法が生まれたことにより、非常に細かな模様が付けられるようになりました。糊防染の技術がさらに発展したものが、現在でも有名な「友禅染」です。加賀友禅はその中でも最高峰とされています。

日本の織物



織物とは、経糸(たていと)と緯糸(よこいと)を交差させて作る布地のことをいいます。日本の織物を糸の種類別に分けると綿織物、絹織物、毛織物、麻織物などがあります。日本の織物の歴史がいつ始まったのかははっきりしませんが、縄文～弥生時代の遺跡から機織の道具が見つかることから、それ以前にはすでに織物が存在していたと考えられています。奈良時代に入ると、西洋や中国から様々な技術が日本に伝わり、平安時代に入ると、さらに技術が向上し、日本独自の文様が誕生します。江戸時代には、養蚕業が推し進められ、全国各地で絹織物が発展します。いずれの時代も絹織物は上流階級しか身に着けられず、庶民は麻や綿の織物を着用していました。そんな中でも、染めや織りを工夫して、庶民でもおしゃれを楽しめるよう、たくさんの種類の織物が誕生しました。

外国の染物

染色文化の歴史は古く、中国では紀元前3000年頃、ヨーロッパでは紀元前2500年頃の青銅器時代、インドでも紀元前2500年には盛んに行われていたことがわかっています。



フィージィ樹皮布

織物の技術が伝わらなかった地域のため、編布と樹皮衣が主な衣類とされていた。赤土や煤椰子油に混ぜて図柄を表しています。



インド印金糸巻紋り

マハラジャのターバン用の染物。鮮やかな赤、黄、藍の三重染めで、緑は黄と藍の併用にある。その後に印金を施しています。

展示の様子



編集後記

第74回有瀬図書館ギャラリー展では「いろは -伝統の色と織物-」と題して、色と布にまつわる資料を集めました。身近な機織りから生まれた縞帳には、江戸～明治の時代に生きた庶民の、色彩や柄のセンスが伺えます。古来より豊かな色彩感覚を持つ日本人にとって、色には身分を表すものや、自然や風土の意味合いを持つものなど、社会生活を営む上で切っても切れない存在でした。今回の展示では、色とりどりの織物や、様々な伝統色をご紹介します。新たな推しカラーが見つかるかも？！普段は閉架資料として、閲覧が制限されているものばかりです。ぜひ、この機会にお楽しみください。

参考文献

きもの用語大全 <http://www.so-bien.com/kimono/>
ワゴコロ <https://wa-gokoro.jp/> デジタル大辞泉、
色見本と配色サイト-color-sample.com <https://www.color-sample.com>
「日本の絞り技法」安藤宏子著/日本放送出版協会
「世界の染物」岡村吉右衛門著/衣生活研究会
ダイロンジャパン「染色の歴史」116.80.16.114/corporate/dye.html

展示では、バースデーカラーの見本を置いてあります！お誕生日の色を探してみてくださいね！

神戸学院大学図書館展示会通信 Meridian第74号

2025年1月6日発行

発行・編集：神戸学院大学 有瀬図書館

〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬518

TEL: 078(974)4584 E-mail: pub-lib@j.kobegakuin.ac.jp

ホームページURL: <http://opac.kobegakuin.ac.jp/>

